19世紀アメリカのプロテスタント教会における反カトリック主義とフィリップ・シャフの『プロテスタントの原則』の歴史的意義――ドイツ改革派教派誌 Weekly Messenger 誌上における論争を中心に――

メタデータ	言語: ja
	出版者:
	公開日: 2023-09-21
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 藤野, 雄大
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000003

19 世紀アメリカのプロテスタント教会における反カトリック主義とフィリップ・シャフの『プロテスタントの原則』の歴史的意義

―― ドイツ改革派教派誌 Weekly Messenger 誌上における論争を中心に ――

藤　野　雄　大

1.　序論：論文全体のテーマと先行研究の整理

1844 年はアメリカ宗教史において特筆されるべき年であると指摘されることがある。アメリカの宗教に関する最初の体系的著作であるロバート・バード（Robert Baird）の『アメリカの宗教』（Religion in America）が刊行されたのが 1844 年であった。また後述するように，同年 5 月にはフィラデルフィアでプロテスタント系住民の反カトリック感情が爆発し，暴動が発生した。さらに 6 月には末日聖徒イエス・キリスト教会（通称モルモン教）の指導者であったジョセフ・スミス（Joseph Smith）が殉教している。これらの大きな歴史的出来事に加えて，ドイツ改革派教会（German Reformed Church）では，後にジョン・W.N ネヴィン（John Williamson Nevin : 1803-1886）と並んで，マーサーズバーグ神学（Mercersburg Theology）を展開する事になったフィリップ・シャフ（Philip Schaff : 1819-1893）が渡米し，神学教師に就任した年でもあった[1]。

マーサーズバーグ神学は，19 世紀ドイツ改革派教会の神学校で展開された神学運動であり，ネヴィンとシャフはその指導者として，アメリカ教会史の中で特筆すべき足跡を残している。マーサーズバーグ神学全体を一言で表現することは極めて困難であるが，ネヴィンの書簡によれば，1843 年に出版されたネヴィン自身のトラクトである『アンクシャス・ベンチ』（*The Anxious Bench*）を以って始まったとみなされている[2]。同書において，ネヴィンは 19 世紀前半にアメリカ合衆国のプロテスタント諸教会に大きな影響を及ぼしていたリヴァイヴァリズムの神学的・方法論的欠点を激しく批判している。同書の反響は大きく，

1　Stephen R. Graham, “Philip Schaff and the Protestant Mind in the Nineteenth Century : A Critique of Religion and Society,” pp., 32-49, p. 32.

2　John Williamson Nevin, “Letter to Dr. Henry Harbaugh,” in *Catholic and Reformed Selected Theological Writings of John Williamson Nevin*, eds., Charles Yrigoyen Jr. and George H. Bricker, Pittsburgh, PA : The Pickwick Press, 1978, p. 407.

ネヴィンはドイツ改革派内外で注目されることになったが，同時にリヴァイヴァリズム肯定派から激しい非難を浴びることになった[3]。

一方で，マーサーズバーグ神学に関する古典的研究書を記したニコルズは，ネヴィンの『アンクシャス・ベンチ』をめぐる論争を，マーサーズバーグ神学の「準備期間」（Preparatory Decade）として位置付けている[4]。またシャフの著作選集の編者でもあるイリゴーエンらは，マーサーズバーグ神学は，ネヴィンとシャフのパートナーシップの産物であり，両者を同神学の創始者（Progenitor）としている[5]。このように，マーサーズバーグ神学が，実際にいつ開始されたのかを確定することは簡単ではない。しかし，確かなことは，マーサーズバーグ神学の原点がネヴィンの『アンクシャス・ベンチ』にあったとしても，シャフという協働者を得ることがなかったならば，マーサーズバーグ神学は誕生しなかったか，あるいはその影響力は，より限定的なものになったということである。実際，本論で記すように，シャフの就任演説は，大きな反響を及ぼすとともに，激しい議論を巻き起こすことになった。

詳細は後述するが，シャフの就任講演は，元来ドイツ語でなされたものであったが，後にネヴィンによって英訳され，出版されている。これが本論で中心的に議論する『教会の現状に関わるプロテスタンティズムの原則』（*The Principle of Protestantism as Related to the Present State of the Church*, 以下『プロテスタンティズムの原則』と略称する）である。『プロテスタンティズムの原則』の歴史的・神学的意義や，マーサーズバーグ神学確立に対して与えた影響については，これまで多くの先行研究の中で論じられてきた。例えばベインズによれば，『プロテスタンティズムの原則』は，「マーサーズバーグ神学の，そしてフィリップ・シャフの生涯の中心的なテーマを紹介していた。同書は，教会の重要性，教会の一致，環大西洋的協力，信条と式文様式の価値，そして最も重要なことに，教会の歴史の発展についての有機的理解を含んでいた」のであり[6]，また「若いシャフがドイツで学んだことをほとんど全て」注ぎ込んだ同書は，「19 世紀アメリカにおける主要な歴史的，神学

3　ネヴィンの『アンクシャス・ベンチ』がもたらしたリヴァイヴァル受容をめぐる論争については，拙論「マーサーズバーグ神学の起源とドイツ改革派教会教派新聞 Weekly Messenger ― 19 世紀アメリカのキリスト教会における教派新聞の意義 ―」東北学院大学キリスト教文化研究所紀要第 40 号 1-17 頁所収（2022 年 6 月発行）において論じている。

4　James Hastings Nichols, *Romanticism in American Theology : Nevin and Schaff at Mercersburg*, Eugene, OR : Wipf and Stock Publishers, 1961, pp. 37-63.

5　Charles Yrigoyen, Jr. and George H. Bricker, eds., *Reformed and Catholic Selected Historical and Theological Writings of Philip Schaff*, Eugene OR : Wipf and Stock Publishers, 1979, p. 5.

6　David R. Bains and Theodore Louis Trost eds., *The Development of the Church the Principle of Protestantism and Other Historical Writings of Philip Schaff*, Eugene, OR : Wipf and Stock, 2017, p. 34.

的著作になる道を辿り始めていた」のである[7]。これほどに重要な意義を持つ同書ではあるが，しかし同時代の評価は必ずしも好意的なものばかりではなかった。『プロテスタンティズムの原則』はドイツ改革派内に留まらず，広範な批判を受けることになったのである。

シャフの『プロテスタンティズムの原則』は，一体どのような批判を受けたのであろうか。この点についても，これまでにも先行研究の中である程度明らかにされてきた。それは簡潔に言えば，当時のアメリカのプロテスタント教会の反ローマ・カトリック的傾向と強く結びついていた。詳細は本論で述べることになるが，シャフの主張は「ローマ・カトリック的」，あるいは「オックスフォード的」異端として受け止められることになったのである。そして，ドイツ改革派教会において，シャフ糾弾の最先鋒となったのが，ジョセフ・F・ベルグ（Joseph F. Berg）であった。しかし，これまでの研究で看過されがちであったのは，ベルグが具体的にどのような批判をしたのか，あるいはベルグ以外にドイツ改革派教会の中で，シャフの主張に対する批判の声は挙がらなかったのか，もしあったとすれば，それは一体どのようなものであったか，という点である。従来の研究は，誤解を恐れずに言えば，多かれ少なかれ，19 世紀に記された古典的なシャフの伝記やドイツ改革派の教派史などに依拠してきたため，一次史料の分析が限定的であった点は否めない。例えば，当時のドイツ改革派教会の教派新聞であるウィークリー・メッセンジャー（The Weekly Messenger，以下 WM と略記）は，シャフの神学的正統性を巡って擁護派と批判派双方の側からの主張が掲載されている。WM は文字通り「週刊」であり，論争の経緯が週単位で時系列にたどることができるようになっている。いわば，マーサーズバーグ神学の論争についての第一級の一次史料と言えるが，しかし，先行研究の中には，WM を部分的にしか参照していないもの，あるいは直接ではなく，別の二次史料から間接的に引用しているものも存在している。

このような状況を踏まえて，本論では，1844 年から 1847 年までのおよそ 3 年間にわたって WM 紙上において展開された，シャフの『プロテスタンティズムの原則』の是非を巡る賛否両論を整理し，分析していく。それによって，同書がドイツ改革派教会内部にどのような反響を及ぼしたのか，どのような点が問題視されたのかを，より具体的，実証的に把握することができると考える。そして，結論を先取りすれば，シャフの『プロテスタンティズムの原則』が激しい論争を巻き起こすことになったのは，広い歴史的コンテキストとしては当時のアメリカのプロテスタント教会に根強かった反ローマ・カトリック感情が多分に関係しているものの，同時にそれぞれの議論を細かく分析すると，それはプロテス

7　George Shriver, *Philip Schaff Christian Scholar and Ecumenical Prophet Centennial Biography for the American Society of Church History*, Macon, GA : Mercer University Press, 1987, p. 22.

タント教会の歴史的意義を巡る見解の相違，プロテスタント教会史観についての重要な議論が含まれていたことが分かる。またシャフの『プロテスタンティズムの原則』は，独立した論争として捉えるよりも，マーサーズバーグ神学形成の過程で生じた一連の論争の流れの中に位置づけることが，実態に即しているということを明らかにしたい。

2. シャフの『プロテスタンティズムの原則』と 19 世紀アメリカのプロテスタント教会における反ローマ・カトリック的感情

序論では簡単に述べるにとどめたが，ここでまずシャフの神学教師就任から『プロテスタンティズムの原則』出版までの概要を記しておく。フィリップ･シャフは, 後年には, マーサーズバーグ神学の創始者となるだけでなく，福音同盟会（The Evangelical Alliance）のアメリカ支部の創設にも関わり，さらに学問的にはアメリカで最も高名な教会史家としての名声を獲得することになった。しかし，1844 年に渡米した頃には，まだ 20 代前半の若さであった。スイスで生まれ，ドイツのベルリン大学で神学教育を終えたシャフは，当時合衆国ペンシルヴァニア州のマーサーズバーグにあったドイツ改革派教会の神学校からの招聘に応じることになった。ドイツでも将来を嘱望されていた新進気鋭のシャフは，なぜドイツを離れて, 遠い異国の地に移る事になったのだろうか。同校の神学教師就任にあたっては，ドイツ系移民によって構成されていた北米のドイツ改革派教会にドイツの先進的な神学を導入することが期待されていたと，晩年にシャフは回顧している。こうして若く使命感に燃えていたシャフは，アメリカへの移住を決意し，ベルリンを発つことになった。その途上，シャフは，7 週間にわたって英国のロンドンおよびオックスフォードに滞在している。それはアメリカでの務めの準備期間であった。彼の地でシャフは, エドワード･B･ピュージ（1800-1882）やジョン・ヘンリー・ニューマン（1801-1890）ら当時話題になっていたオックスフォード運動の指導者たちと交流を深めたという。このことは，シャフの『プロテスタンティズムの原則』の内容にも大きく影響することになった[8]。

その後 40 日の航海を経て，シャフは 1844 年 7 月にニューヨークに達し，さらにドイツ改革派教会の牧師や信徒から熱烈な歓迎を受けながら，ペンシルヴァニア州に移った。そして 1844 年 10 月にペンシルヴァニア州レディングの教会で就任演説を行った。この講演は，当時のドイツ神学の最先端の成果をふまえていたが，当初はドイツ語で行われたこともあり，アメリカの一般教会員にはその意図が正しくは理解されなかったようである。そ

8 Philip Schaff, “Dr. Shaff’s Farewell Address to the Synod of the German Reformed Church, Lancaster, PA., October 24, 1892,” in *Reformed and Catholic Selected Historical and Theological Writings of Philip Schaff*, eds., Charles Yrigoyen, Jr. and George H. Bricker, Eugene OR : Wipf and Stock Publishers, 1979, p. 11.

こでネヴィンによる英訳と解説を付したものが，約 1 年後の 1845 年 6 月に『プロテスタンティズムの原則』として出版されることになった。シャフにとっては，講演の内容は当時のドイツで普及していた神学的理解を踏まえたものであり，それが後に紹介するような激しい論争を巻き起こすことになるとは予期していなかったようである。しかし，当時のアメリカ社会の反カトリック的風潮の影響に巻き込まれる形で，渡米直後からシャフの主張は，「ローマ・カトリック的傾向」（Romanizing Tendency）を持つものとして，異端視されることになってしまった。本論でも紹介していくように，後にシノッドの決議によって，この嫌疑は正式に晴らされるものの，それで論争が終わったわけではなく，むしろ，長い論争の始まりとなっていった[9]。

『プロテスタンティズムの原則』は，シャフと翻訳者のネヴィンによる序論の後，2 部からなる本論，そして本論全体の要約として 112 項目からなる「現代に対するテーゼ」（Theses for the Time）によって構成されている。同書の分析は，本論の論点ではないので詳述は避けるが，以下，簡潔に内容を要約していきたい。本論の第 1 部は「宗教改革についての回顧」（The Retrospective Aspect of the Reformation）となっており，プロテスタンティズムの原点である宗教改革の歴史的意義をどのように理解すべきかを論じている。シャフは，宗教改革の本質とは，中世の西方教会に対する抵抗運動ではなく，正統な発展であると位置づけている。つまり中世の西方教会と宗教改革が断絶したものではなく，連続したものであることを強調したのである。その意味で，プロテスタンティズムは，ローマ・カトリシズムの否定という以上に，積極的な意味を持つことになる。また中世の西方教会からの歴史的連続性を持つがゆえに，教理的な相違が存在しつつも，ローマ･カトリック教会とプロテスタント教会は，分裂した状態にあっても，なお，互いに結びつきを保持しているということになる。さらにシャフは宗教改革によってプロテスタンティズムは完成したのではなく，いまだ発達途上にあり，プロテスタンティズムとカトリシズムに分裂した西方教会の再一致に向けた運動が求められると考えている。

第二部では，シャフは 19 世紀当時のプロテスタント諸教会の状況を展望し，プロテスタンティズムが，合理主義（Rationalism）と分派主義（Sectarism）という二つの病（diseases）に蝕まれていると理解する。この二つの病は，プロテスタンティズムの主観主義（subjectivism）的傾向によってもたらされた帰結であり，英国とアメリカ合衆国が，最もその影響を強く受けているという。そして，このような合理主義と分派主義の弊害が，教会の本性と個々の信者との関係性についての適切な理解の欠如をもたらし，キリストの肢体なる教会が分裂していることに対する無関心を生じさせていると捉えている。

9　Ibid., p. 13.

上記の弊害を踏まえて，シャフは，講演直前に親交を深めたオックスフォード運動（ピュージズム）についても言及している。シャフによれば，オックスフォード運動は，プロテスタンティズムの病を是正しようとするリアクションではあり，ローマ・カトリシズムとの歴史的連続性を強調するが，結局，その運動は不十分であり，分裂を解消するための真の治療薬（remedy）になることはないと指摘する（テーゼ 72，82）。そして，オックスフォード運動の最大の問題点としては，16 世紀の宗教改革の歴史的意義を正しく理解せず，またそれゆえに，それ以降のプロテスタンティズムの歴史的発展についての認識が不適切である点を挙げている（テーゼ 78）。

以上を踏まえて，シャフは，真の立脚点として，「プロテスタント・カトリシズム」（Protestant Catholicism）あるいは「福音主義的カトリシズム」（Evangelical Catholicism）という立場を提唱する。これは，同書の骨子とも言うべきものであり，時代の必要に応えるものであるとシャフは述べる（テーゼ 83）。この「福音主義的カトリシズム」というのは，ローマ・カトリシズムとプロテスタンティズムの両極端の過ちを是正するものである。オックスフォード運動との相違点として，シャフが強調するのは，「福音主義的カトリシズム」は，ルター派であろうと改革派であろうと 16 世紀の宗教改革によって提唱された教理を放棄するものではないということである（テーゼ 84）。そればかりではなく，「プロテスタンティズムの病」として挙げられた合理主義と分派主義も含めて，宗教改革以降のプロテスタンティズムの歴史も，その誤謬は取り除かれなければならないが，一定の歴史的意義を有しているものと認める。合理主義は，根拠のない偏見や妄信を取り除き，教理的正統性を明らかにする上で必要であった合理主義も分派主義も，歴史的妥当性を持っているのである（テーゼ 87，88）。同様にシャフは，分派主義にも肯定的側面を見い出す。シャフによれば，宗教的分裂とは多くの場合，教会の現実的悪によって生じるものであり，分派主義は，実質的には教会にとって必要な道徳家や改革者と見なせるからである。さらに大部分の分派が，ある特定の敬虔を極度に強調したものであり，個々人の宗教的行動を活性化させることに貢献してきたことも，シャフは指摘している（テーゼ 93，94）。

しかし，そのような一定の意義を持ちつつも，福音の真理は分離不可能な一致を生み出すがゆえに，合理主義や分派主義は完全に正当化されることはない。両者は，教会の歴史的発展の「過渡期」としての必然性を有しているものの，歴史の発展のプロセスの中で，やがてはより高次のものへと解消されていくことになるからである。ここに至って，シャフは「福音主義的カトリシズム」が目指すものとして，教派や分派の相違を超えたプロテスタンティズムとローマ・カトリシズムの対立の調停を通して，普遍的教会への関心を高め，完全で栄光に満ちた一致の実現を展望しつつ，同書を終えている（テーゼ 111，112）。

このようなシャフの歴史観，つまり現実の教会における弊害が時代の進展に伴って，改善され，より良いものになっていくという考え方は，「歴史的発展の理論」（the theory of the historical development）と称される。シャフは，教会を固定的なものとは捉えず，歴史の中で有機的に発展していくものと理解していた。もっともこの歴史観は，決してシャフの独創ではない。それはヘーゲルに由来するドイツ・ロマン主義に影響されたものであった[10]。この歴史的発展の理論，あるいは発展的教会史観は，晩年に至るまで，シャフの一貫した歴史観であった。事実，シャフは最晩年に神学の概説的著作を記しているが，その中で歴史的発展の理論について以下のように記している。

> 歴史とは一貫した流れであり，発展である。しかし，それは罪と誤謬による多くの障害，逆行，病を伴っている。港々を立ち寄りながら航行する帆船のように，歴史は，真っすぐではなく，ジグザグに発展していく。生きているものは，すべて運動し，成長していく。死んだものだけが静止している。世俗的な歴史とは，「環境に最適化して生存するための格闘」に基づく人間の概念の発展であり，教会史とはキリスト教の概念，あるいは神の国の起源，成長，そして勝利の歴史の発達である。啓示は，少しずつ，発展し，人間の理解の中に受容されていく。それはキリストにおいて頂点を極める。〔中略〕真の発達の理論とは，キリストがすべてにおいてすべてとなられるまでの間における，キリストを頭とする教会の継続的成長の理論，あるいはキリスト教の発展的理解や適用である[11]。

上記の引用にも示されているように，シャフの教会史観は，キリスト論的であり，また終末論的である。教会の歴史とは，創造から終末へと至る神の救済の歴史，神の国の実現の歴史であり，その中心点はキリストの自己啓示に基づくということになるからである。その意味で，シャフによれば，「歴史家は，歴史における，すべての暗く，憂鬱な特徴とは関係なく楽天家であるにふさわしい理由がある」のである[12]。このような教会史観に立つがゆえに，シャフにとって，宗教改革以来の教会の分裂は，一過的なものでしかなく，終末に向けて，再一致へと導かれていくものと理解されることになった。

しかし，このようなシャフの歴史的発展の理論，およびその理論に基づくローマ・カト

10　Bains and Trost eds., *The Development of the Church*,16.

11　Philip Schaff, *Theological Propædeutic : A General Introduction to the Study of Theology, Exegetical, Historical, Systematic, and Practical, Including, Encyclopædia, Methodologym and Bibliography, A Manual for Students*, New York : Charles Scribner's Sons, 1893, pp., 239-240.

12　Ibid, pp., 236-237.

リック教会とプロテスタント教会の再一致への希望は，当時のアメリカのプロテスタント教会の反ローマ・カトリック的風潮の中で激しい攻撃にさらされることになった。ジェーン・ファレリーによる研究では，当時のアメリカにおける反ローマ・カトリック的風潮は，1840 年代のアイルランド系移民の大量移入に関係しているという。ローマ・カトリック教徒が大半を占めるアイルランド系移民が，「ジャガイモ飢饉」の影響によって，アメリカに大挙して到来し，アメリカ社会の貧困層を構成することになった。そして当時のアメリカ社会における暴力犯罪の増加が，アイルランド系移民と結びつけられることになり，ひいてはローマ・カトリック系住民への偏見が助長されることにも発展していったという。特にペンシルヴァニア州では，フィラデルフィア聖書暴動（1842-44 年）に象徴されるように，反ローマ・カトリック的風潮が激化することになった。この時には，フィラデルフィアのカトリック教会が焼き討ちに遭い，死傷者も出る事態にまで発展していた[13]。

ドイツ改革派教会の教会史家であったジェームズ・I・グッドもまた，シャフの就任講演の時期の悪さを指摘している。「外国人として，シャフは，当時のアメリカ人のローマに対する敵愾心を完全に見誤った。それが彼のローマへの歩み寄りを，プロテスタントへの反逆と多くの人に見なさせてしまった[14]。」そして，ドイツ改革派における反ローマ・カトリックの急先鋒だったのが，ジョセフ・F・ベルグであった。ベルグは，ドイツ改革派教会の牧師であり，またわずかの間ではあったが，同派の神学校で古典語の教師としても働いていた。その後は，フィラデルフィアの教会（Race Street Reformed Church）の牧師となった。その後，一連のマーサーズバーグ論争の後，1852 年にドイツ改革派教会からオランダ改革派教会（後の Reformed Church in America）に転会し，同派のニューブランズウィック神学校の教師にもなっている[15]。シャフへの批判は，ベルグが『プロテスタント・バナー』誌（*Protestant Banner*）という小冊子に記したことが発端になっており，その後，ベルグは，自身が編集人を務めていた『プロテスタント・クウォータリー』誌（*Protestant Quarterly*）で継続してシャフを批判し続けた[16]。ベルグは，ローマ・カトリック教会を批判する著作を記しており，また 1843 年にドイツ改革派教会のシノッドでの決議で，ローマ・カトリック教会による洗礼の有効性を否定するように議論を導こうとした。この時は，シノッドでの議論は二分され，結果的には僅差で，ローマ・カトリック教会の

13 Maura Jane Farrelly, *Anti-Catholicism in America, 1620-1860*, Cambridge : UK.,2018, pp., 135-143.

14 James I. Good, *History of the Reformed Church in the U.S. in the Nineteenth Century*, New York : The Board of Publication of the Reformed Church in America, 1911, p. 219.

15 Theodore Appel, *Recollections of College Life, at Marshall College, Mercersburg, Pa., from 1839 to 1845 : a Narrative, with Reflections*, Reding PA : Daniel Miller, Printer and Publisher, 1886, pp., 175-176.

16 Good, *History of the Reformed Church*, pp., 219-220.

洗礼の有効性が認められることになったという[17]。このように，シャフの『プロテスタンティズムの原則』が論争に発展していった背景には，当時のアメリカ合衆国における反ローマ・カトリック感情が存在していたことが分かる。

3. シャフの就任から東部シノッドでの決議まで

W M ではシャフの『プロテスタンティズムの原則』を巡って生じた論争をどのように取り扱っているのであろうか。私見では，その論争は大きく二つに区分することができると考える。第一部は，1844 年 8 月のドイツでのシャフの按手式（ordination），10 月 25 日の就任式から始まり，ベルグらに主導されたフィラデルフィア・クラシス（Philadelphia Clasis）によるシャフへの非難決議，そして，1845 年 10 月に開催された，同非難決議に対する東部シノッド（Eastern synod）での議論まで。第二部は，東部シノッドでの議論を不服としたベルグら反対派とシャフ擁護派による W M 誌上での応戦である。本項では，まず第一部について論じていく。

W M では，1844 年 8 月 28 日版と 9 月 4 日版において，ドイツで行われたシャフの按手式について報じている。シャフの招聘に際して推薦人の一人であった F.W. クルムマッハー（Krummacher）牧師の司式と紹介文（address）[18]，そしてその後になされたシャフ自身の講演（discourse）が全文英訳された上で掲載されていることからも[19]，当初から若き神学教師の動向に高い関心が寄せられていたことが窺える。そして 11 月 6 日版では，10 月 25 日に，マーサーズバーグから少し離れたペンシルヴァニア州レディング（Reading）の教会で行われたシャフの就任式（Inauguration）の報告が記されている。それによれば，ネヴィンによるシャフの紹介と，B.S. シュネック（Schneck）によるドイツ改革派教会の教会憲法を遵守する旨の問いかけと誓約（constitutional questions），T.H. ラインバッハ（Leinbach）によるシャフへの歓迎の挨拶が行われた[20]。さらに，同記事にはシャフの就任講演（後に『プロテスタンティズムの原則』として出版）に対する感想が記されている。

> それに続くシャフ博士の就任講演は，熟練した出来であった。深遠で具体的な考えに満ちており，特別な丁重さを持って語られた。それは，確かに多少長く，そして講

17 Joseph F. Berg, *Lectures on Romanism*, Philadelphia, PA : D. Weidner, No. 62 North Fourth Street, 1840. Good, *History of the Reformed Church*, p. 220.

18 WM, August 28, 1844.

19 WM, September 4, 1844.

20 WM, November 6, 1844.

演の大部分は，聴衆のほとんどにとって理解の範疇を超えたものではあったが，それでも際立った注目と関心を以って受け止められていた。その講演の中心的話題は，宗教改革の真の生命と精神そのものであった[21]。

上記の引用が示しているように，シャフの講演は，洞察に満ちたものであったが，同時にそうであるが故にアメリカの教会にとっては耳慣れない，新鮮なものとして受け止められていたことが分かる。これは序論で触れたように，同講演がドイツ語でなされたということにも起因しているだろう。ドイツ系移民によって構成されていたドイツ改革派教会とは言えども，その中には移民第 2 世代，3 世代のものが含まれていたし，第 1 世代であっても移住してから長い時間を経ていれば，円滑な理解が困難であった可能性がある。また，そもそも高度に神学的講演であれば，一般の教会員にとっては縁遠いものであったことも考えられる。いささか拍子抜けすることではあるが，このシャフの講演そのものの真意の「分かりにくさ」こそが，実のところ，後の論争の激化の一端になっていくことになる。

シャフにとって不運であったことは，先に記したような反ローマ・カトリック的風潮の影響の中で，シャフの講演のおよそ一週間前，10 月 17 日にペンシルヴァニア州アレンタウンで開催されたシノッドの開会説教をベルグが行なっていたことであった。この時のベルグの開会説教は，11 月 20 日の W M に掲載されている。ベルグの説教の趣旨は，アメリカにおける改革派教会の歴史的起源についてであったが，その中でベルグは，宗教改革，さらにドイツ改革派教会と，中世の異端運動であったワルドー派の教理的共通性，連続性を強調している[22]。つまり，ベルグは，正統的教理とは，ローマ･カトリック教会ではなく，ワルドー派のような異端とされる運動を通してプロテスタント教会に伝えられたと認識しているのである。これは，先に紹介したシャフの『プロテスタンティズムの原則』におけるプロテスタンティズムとローマ・カトリシズムの歴史的連続性とは正反対の理解ということになる。このことからも，シャフの就任講演を巡る論争は不可避のものであったと言えるだろう。

しかし，その後しばらくの間，W M 誌上は平穏を保っている。論争が本格的に開始されるのは，シャフのドイツ語による就任講演が加筆の上で英訳され，『プロテスタンティズムの原則』として出版されてからのことであった。同書出版の記事は，W M の 1844 年 6 月 18 日版に掲載されている。この記事では，同書の簡潔な要約が記されるとともに，「浅薄な読者や怠惰な思考の者にとっては，この本を読むことは面白くないし，益もないかも

21　Ibid.
22　W M, November, 20, 1844.

しれない。同書の全ての頁には，卓越した思索が満ちているが，それを適切に理解するには時間と精神的努力が求められるだろう」とも述べられている[23]。この記述もまた，シャフの主張が，当時のドイツ改革派の読者にとって理解困難なものとして受け止められていたこと，さらにＷＭ誌面では表面化していなくとも，批判的な意見が存在していたことをも示唆していると言えるだろう。しかし同時に，この記事からもＷＭ誌の編集部は，シャフの『プロテスタンティズムの原則』を当初から肯定的に受け止めていたことも分かる。そして，それゆえに後述するように，ベルグらの批判は，シャフやネヴィンだけでなく，ＷＭ誌の編集部にも向けられることになっていった。

8 月になるとＷＭ誌は，シャフの『プロテスタンティズムの原則』に触発される形で，ネヴィンによる「偽プロテスタンティズム」（“Puseudo Protestantism”）が 5 週にわたって掲載されている[24]。同論文は，明確にネヴィンがシャフの主張を擁護する意図を持って記されている。

論争が重要な局面を迎えたのが，10 月のことである。ＷＭ1845 年 10 月 1 日版では，フィラデルフィア・クラシスの議事録が掲載されている。フィラデルフィア・クラシスには，ベルグも属しており，議論は終始ベルグ派の主導に進められていった。以下，その議事録における要点を整理したい。フィラデルフィア・クラシスに属する数名の議員から，ＷＭの編集者が，彼らが宗教的問題に関する投稿をする権利を侵害しているという非難が挙がった。そして，この問題を審査する特設委員会が設けられ，その委員会提案に修正を加える形で，以下の決議がなされた。

> クラシスは，あらゆる雑誌の編集者は，疑いなく，寄稿された文書を採用するか，拒否するかについての自由裁量権を持っているが，同時に，それは公平性を保っていなければならないと考える。また我々は，ウィークリーメッセンジャーは，ドイツ改革派教会の公的機関として，その教会の構成員全体に適切な方法で主張を公にする権利を与えるべきであると考える[25]。

この決議からは，ベルグら反対派の投稿がＷＭ誌への掲載を拒否されていた事情を窺うことができる。そしてこの決議案がＷＭ誌に送付されるべきことも定めている。

一方，シャフの『プロテスタンティズムの原則』に対する調査委員会も，動議に基づい

23　W M, June 18, 1844.
24　W M, August 13, 20, 27, September 3, 10, 1845.
25　W M, October 1, 1845.

て設けられている。この委員会には，ベルグも含まれていた。そして同委員会の報告に基づき，以下のように決議された。要約すると以下のようになる。1. 信仰と実践に対する唯一の規範としての聖書。人間的付け足しや伝統の否定。2. 信仰によって聖礼典が有効性を持つ。3. 聖礼典を受ける者の霊的状態に聖礼典の有効性が依存しないとすることは，信仰を伴わない聖礼典は無益である偉大な真理と矛盾する。4. 霊的生命は，聖霊の影響を活性化することを通して，真理によってキリストから与えられるものであり，教会の儀式は霊的祝福が伝達される手段であっても，霊的生命を与えることはできない。5. 聖餐における会衆へのキリストの臨在は，実体的なものではなく，象徴的なもの，終末に至るまでは霊的なものであり，聖書の記述は文字通りではなく，象徴的に理解されるべきである。6. 上記のような聖書的教理に反する教えが『プロテスタンティズムの原則』の中には繰り返し，述べられている。

このような決議を踏まえて，同書に対する疑念に対して，シノッドで調査を行うことも付け加えられた。この決議は，投票の結果，ベルグ，そしてドイツ改革派における主要なフィニー主義的リヴァイヴァリストであったジェイコブ・ヘルフェンシュタイン（Jacob Helffenstein）[26] など 11 名の牧師・長老の賛成，1 名（J.S. Foulk）の反対，3 名の投票拒否によって，可決されている。唯一決議に反対したフォールク牧師は，反対理由として福音の真理に反対するのではなく，『プロテスタンティズムの原則』が危険なローマ･カトリック的誤謬を述べていると断言するには性急であり，現段階では，非難決議には同意できないという見解を示している。また，投票を放棄した 3 名の牧師は，決議には部分的に賛成するものの，シャフの言説を審議し，謬見が含まれていることをシノッドで明らかにすることを望まないという立場であり，現段階ではシャフの本には，異端的な教えも，ドイツ改革派教会の信仰基準に矛盾する教えも認められないと主張している。

またヘルフェンシュタインが提起した，シャフの著作に関係なく，そもそもローマ・カトリック教会がキリストの教会の一部であるかどうか，という疑問に対しては，「プロテスタント教会の普遍的な同意として，教皇制（papal system）が大いなる背教」であるとされた。このようにフィラデルフィア・クラシスの非難決議は，ベルグらの神学あるいは教会観を反映した極めて反ローマ・カトリック的なものであり，シャフの主張がローマ・カトリック的異端であると激しく批判するものであった。この決議が掲載されることで，

26 ヘルフェンシュタインによるネヴィンへの批判については，拙論「マーサーズバーグ神学の起源とドイツ改革派教派新聞 Weekly Messenger ― 19 世紀アメリカのキリスト教会における教派新聞の意義」, 東北学院大学キリスト教文化研究所紀要第 40 号 1 － 17 頁を参照のこと。ヘルフェンシュタインも，マーサーズバーグ論争に敗れる形で，ドイツ改革派を去り，のちに長老派に転向していった。

W M 誌は両派の激しい論争の場となっていく。

おそらく非難決議における反対派の投稿を拒否しているという編集部への批判を考慮したのだろう。同じ 10 月 1 日版には, フィラデルフィア・クラシスの議事録とともに, S.R. というイニシャルの人物による投稿が掲載されている。この S.R. の投稿でも，W M では，ネヴィンらの投稿は大きな分量を割いて掲載しているのに対し，反対派の投稿は掲載されてこなかったことへの批判がなされている。その上で, ネヴィンやシャフらマーサーズバーグの教授たちが，ドイツ改革派教会の信仰的立場を逸脱し，オックスフォード運動やローマ・カトリック教会に接近していること，またそれによって，ドイツ改革派教会内部に分裂を生じさせ，さらにオランダ改革派教会や合衆国長老派教会などの姉妹教会との友好関係をも損なっていると指摘している[27]。

一方，1845 年 10 月 15 日，同 22 日版の W M にはフィラデルフィア・クラシスの決議や S.R. の投稿記事への反論として，シャフやネヴィンを擁護する投稿記事が複数掲載されている。「一教会員」からの「我らの教授たちへの非難」では，ドイツ改革派教会の信仰基準である『ハイデルベルグ信仰問答』に厳密に照らし合わせることなく，シャフやネヴィンを「オックスフォード主義者（ピュージー主義者)」であり，危険な傾向を持っていると非難することの不当性を訴えている。その上で「一教会員」は,『プロテスタンティズムの原則』を引用しつつ，シャフがオックスフォード運動に完全に同意している訳ではないと指摘している[28]。一方，同記事ではシャフだけでなく，ネヴィンの「偽プロテスタンティズム」に対する批判に対しても反論を加えていることが興味深い。これが示しているのは，シャフの『プロテスタンティズムの原則』を巡る論争が，公然化した当初から，必ずしもシャフだけを対象にしたものではなく，ネヴィンの神学も同時に批判の対象になっていたということである。

さらに「R」（イニシャルのみ）による東部ペンシルヴァニア・クラシスで緊急に開かれた会議の報告も掲載されている。この特別会議は，同クラシス所属の 10 名の牧師と数名の長老たちから構成されていた。この会議の中ではマーサーズバーグの神学教師を異端であると弾劾するフィラデルフィア・クラシスの決議に対する対応策が協議されている。この会議では，最初に自由な意見交換がなされている。それによれば，ベルグたちの意見に同調する形で，賛否両論の意見交換がなされることを求める意見がある一方で，礼節に反する形で神学教師に対する攻撃が行われたことを非難する意見もあった。そして，東部ペンシルヴァニア・クラシスの全構成員が一致して，ローマ・カトリック的教理に与する

27　WM, October 1, 1845.
28　“The Charges Against Our Professors,” WM, October 15, 1845.

ものではないことを確認した上で，以下の決議を行ったことが記されている。

> 決議：我々は真実に宣言する。マーサーズバーグの教授たちが，誤った見解を持っているとして，教会内部のある者たちから不当に，また不法に攻撃され，弾劾されている。しかし，出版されている見解に対する感想や検証として，我々は，これらの見解は正しく理解されるならば，この教会に広く認められている意見と完全に一致していることを信じる。これらに対して加えられた激しい攻撃は，ただ彼らの意見への誤解，あるいは難癖（censoriousness）によるものである。我々は，シノッドへの我々の代議員に対して，この決議を我々の見解として提示するように求める[29]。

さらにRは，報告に合わせて私見も述べている。この中で，Rは，宗教改革の父祖たちが既に，ローマ・カトリック教会を，極端に堕落したものとしながらも，同時にキリスト教会の一部と考えていたことを付言している。これは先述のフィラデルフィア・クラシスの決議に対する反論であろう。Rはまた，S.R. の記事も同様に誤解に基づくものであり，結論として，誤解や感情論に基づいたアジテーションは，早晩収束するだろうと結んでいる[30]。

この他，数名の賛成派による投稿がある一方で，先述のS.R. による新しい投稿も掲載されている。S.R. の投稿の論調は，いささか感情論に流されているものの，当時の反対派の主張を捉えやすい。ここでのS.R. の危惧は，従来の反対派の主張の繰り返しになってしまうが，シャフがプロテスタンティズムには誤りがあると主張し，その上で，ドイツ改革派教会をオックスフォード運動やローマ・カトリック教会へと接近させようとしているというものである。S.R. は以下のように述べる。

> 私は，読者の注目を集める『プロテスタンティズムの原則』のいくつかの文章を強調した。シャフ博士は，現在，プロテスタンティズムに存在しているとされる過ちや欠陥についてのある治療法を提示しているが，その治療法とは，ピュージー主義の体系の中に見出されるものである[31]。

すでに述べたように，またRの投稿にもあったように，ここでのS.R. の主張は，明ら

29 “Special Meeting of the East Pennsylvania Classis &c., &c.,” WM, October 15, 1845.
30 Ibid.
31 S.R., “The Protestantism of Mercersburg,” Ibid.

かに誤解，あるいは曲解と言わざるを得ない。しかし，このような反対派の主張からも，当時のアメリカのプロテスタント教会において，いかにローマ・カトリック教会やオックスフォード運動に対する忌避感情が強かったかということを窺い知ることができるだろう。また対立の根底には，根強い偏見と共に，宗教改革以来のプロテスタント教会の歴史をどのように理解するかという歴史認識の問題が存在していたことも示唆される。

フィラデルフィア・クラシスの非難決議を受け，東部シノッドでは特設委員会（正式には，「シャフ博士の『プロテスタンティズムの原則』に関するフィラデルフィア・クラシスの決議についての委員会」）を設けて，シャフの著作を調査している。WM の 1845 年 11 月 5 日版には，同委員会の報告および，東部シノッドでの議論が詳細に報じられている。

特設委員会の報告では，まず冒頭において，フィラデルフィア･クラシスの多数派が，シャフを弾劾したことに対する遺憾の意が示されている。そして委員会は，同クラシスによる決議が「完全なる思慮と先見性の欠如」によるものであると，強い口調で批判している。ここにも端的に表れているように，特設委員会の報告は，完全にシャフを擁護するものであった[32]。

その後，特設委員会報告では，フィラデルフィア・クラシスの決議によるシャフ弾劾の各条項を逐次論駁しつつ，最後に以下のような結論を示している。

1. 当該著作，およびその序論と巻末付録についての極めて真剣かつ注意深い審査の後，委員会は，フィラデルフィア・クラシスによる非難を支持しうるもの，あるいは我が神学教授たちが真のプロテスタント的立場から逸脱する傾向にあるといった疑念や恐れを導くものは，全く含まれていないことに完全に同意した。反対に，彼らはしっかりとそれ〔真のプロテスタント的立場〕を保持している。そして同書は，適切に理解されるならば，真の宗教的関心を促進し，その著者にはプロテスタントの共同体から敬意と親愛が示されるものである。
2. 神学校の教授たちは，神学校を建て上げ，教会の名誉と豊かさを増進するための誠実かつ労を厭わない努力ゆえに，教会のすべての友人たちから好意ある共感と暖かい支援を受ける資格があるし，また与えられなければならない。
3. 個人の，あるいは教会の組織の権利や性質を制限したり，自由に神学校に職責ある者の教理や行いを調べたり，あるいはフィラデルフィア・クラシスの多数派による最近の動きを導いた動機について疑問を持ったり，感想を述べる意図は少し

32 ‘Report On th Committee on the Resolutions of the Philadelphia Classis in Reference to Dr. Schaf’s “Principle of Protestantism”,’ WM, November 5, 1845.

もないが，シノッドは，教会憲法によって示されていることや，教会の慣習上認められていることに基づく筋道だけが，神学教授に対する不満をシノッドに持ち込む，唯一安全で，真実で，適切な筋道であるという，はっきりした考えを持っている[33]。

このような委員会報告に併せて，WM にはベルグによる委員会報告への反論と，J. H. A. ボンバーガーによるベルグの反論への応答が掲載されている[34]。ベルグの反論は，従来の主張に加えて，委員会報告でフィラデルフィア・クラシスの決議が浅慮によるものと断定されたことへの批判が記されており，目新しいものはない。一方，ベルグの反論に応答しているボンバーガーは，1850 年代からおよそ 30 年にかけて，ネヴィン，シャフらマーサーズバーグ神学者と，改訂版式文の方針を巡って激しい論争（いわゆる式文論争）を繰り広げたことで知られているが，この時点ではシャフたちを擁護しているのが興味深い。このことは，本論で扱っているシャフの『プロテスタンティズムの原則』を巡る論争と，後の式文論争とは，マーサーズバーグ神学が形成されていく中で生じた一連の論争であるものの，内容的に見るときには，必ずしも一様ではなく，区別して理解する必要があることを示している。

シノッドでは，委員会報告，ベルグの反対意見，ボンバーガーによるベルグへの反論を朗読し，当事者であるシャフやネヴィンの弁明などを聞き，3 日間にわたって協議を重ねている。そしてその結果，委員会報告が賛成 40 票，反対 3 票で可決された[35]。この時の委員会報告受諾に反対した議員は，ベルグ，および同じフィラデルフィア・クラシス選出の長老であったジョン・ガーナー（John Garner），そしてもう一人の長老（S. Lore）だけであり，ベルグらの影響力は限定的でフィラデルフィア・クラシス以外ではほとんど支持されなかったことがわかる。こうしてシノッドにおいて，シャフとネヴィンの異端の嫌疑は公式に晴らされることになったのである。

4. その後の論争

前項では，シャフの就任からシノッドでシャフの教理的正統性が確認されたことまでを

33 Ibid. 委員会の構成員は，B.C. Wolfe, H. Bibighaus, T.L. Hoffeditz, T.H. Leinbach, D. Ziegler, A.H. Kremer, S. Seibert, M. Hensell, G.C. Welker の 9 名。

34 J.F. Berg, “Protest of the Rev. Dr. Berg Against the Adoption of the Above Report,” J.H.A. Bomberger, “Reply to the Above Protest,” Ibid.

35 “Proceedings of Synod,” Ibid.

述べた。しかし，シノッドでの結論は，論争の終息をもたらすことはなかった。WM 誌上には，その後もシャフやネヴィンの神学に対する批判が繰り返されていくことになった。本項では，シノッドでの決議後，どのような議論が交わされたのか。論争の争点はなんだったのか。あるいは，どのように議論が変遷していったのかを論じていきたい。

全体の傾向としては，ベルグによるシャフ批判は WM の誌面においては目立たなくなっている。例えばベルグは WM の 1846 年 3 月 4 日版で「キリストの位格」と題する投稿をしているが，これはネヴィンの聖餐論に対する批判となっている[36]。これは本論の主題とは外れるが，同年に出版された，ネヴィンの主著とも言うべき『神秘的現臨―改革派的あるいはカルヴァン的聖餐論についての考察』[37] に触発されたものと言える。ベルグだけでなく，シノッドの決議以降，その他の投稿者の議論も，シャフへの攻撃から徐々にマーサーズバーグの聖餐論に焦点が移っていく傾向は認められる[38]。

しかしながら，シャフの『プロテスタンティズムの原則』を発端とする議論も同時に続けられていた。それは，主に同書に示されているシャフの歴史観，とりわけ歴史的発展の理論を巡るものであった。プロテスタントの歴史をどのように理解するかが，重要な論点になっていたのである。

WM の 1845 年 12 月 10 日号では J. H. G.（ドイツ改革派の牧師・神学者であった J.H. Good）が，ベルグが提唱したプロテスタントをワルド―派と結びつける歴史観に反論している。グッドは，同記事で明確に，プロテスタント教会が，ローマ・カトリック教会から生じたものであり，ワルド―派から生じたとする歴史的根拠がないことを指摘している[39]。一方，反マーサーズバーグ陣営のものとして注目されるのは，J.H.（イニシャルのみ。おそらくジェイコブ・ヘルフェンシュタインを指す。）の投稿である。J.H. はシャフの歴史的発展に関する批判を複数回記しており，それが WM 誌上におけるさらなる議論を惹起している。

WM の 1846 年 8 月 12 日号で，J.H. は J.S. ストーン（Stone）の「開かれた神秘」（The Mysteries opened）という論文を紹介する形で，シャフの歴史的発展の異論を批判している。J.H. は教会の歴史を発展的に捉える場合，それ以前の時代よりも，後の時代の方が，必然

36　J.F.B, “The Person of Christ,” WM, March 4, 1846

37　John Williamson Nevin, *Mystical Presence : a Vindication of the Reformed or Calvinistic Doctrine of the Holy Eucharist*, Lippincott & Co., Philadelphia : PA, 1846.

38　例えば，J.H., “The Union Between Christ and Believer,” J.W.N, “The Human Christ,” WM, February 11, 1846. J.W.N., “False Theories of the Mystical Union,” WM, March 25, 1846. J.W.N は，明らかにネヴィンである。一方，J.H. はジェイコブ・ヘルフェンシュタインであると思われる。

39　J.H.G, “Is the German Reformed Church a Branch of the Waldensian ; or Do We Spring From the Catholic Church?,” WM, December 10, 1845.　Good, *History of the Reformed Church*, p., 221.

的により良いもの，より発展したものと理解されることになるが，その場合，4 世紀のラテラノ公会議までの古代教会の歴史よりも，中世の教会の方が，より優れたものということになってしまうと指摘する。必ずしも学問的に厳密な議論ではなく，一般読者向けの論調ではあるが，ここには古代までの教会の歴史を神聖視し，中世の教会を堕落した教会と見なす，ある種の教会史観が存在していることが分かる。なお，この J.H. の投稿に関しては，編集部から注意を促す補足が付されている。それによれば，ストーンの論文は，オックスフォードのニューマンの歴史的発展の理論について述べたものであり，シャフの理論についてではないと指摘されている[40]。

この J.H. の投稿に反論する形で，同月 26 日版には，ジャスティス（Justice）というペンネームの人物の投稿が掲載されている。ジャスティスは，シャフの理論とオックスフォードの理論との相違点を示している。ジャスティスは次のように述べている。

> ニューマンは，16 世紀の宗教改革を教会の堕落にしてしまっている。シャフはそれを純化し，より光輝なものに，それを高めている。教会の生命と発展の流れは，ニューマンによれば，ローマ主義（Romanism）にのみ見出されるものである。一方，シャフによれば，それは主にプロテスタンティズムの中に見出されるものである[41]。

このジャスティスの反論に対して，J.H. は 9 月 9 日版で応答している。ここでは，J.H. はシャフとニューマンの間に多少の相違点があったとしても，根本的な要素では，同じことを主張しているのであり，また，ニューマンとシャフの理論の相違は，第一義的なものではなく，二義的な議論であると述べる。その上で，彼は，聖書に照らして，シャフの理論が不健全であると批判する。なぜなら，J.H. によれば，教会の分裂や対立を歴史的発展を促進する要因と見なすシャフの理論は，古代教会の簡素さと純粋さを否定することになるとともに，過去の教会の教理的誤謬や堕落だけでなく，新しい誤謬や異端をも肯定することになるからである[42]。

これに対してジャスティスは，10 月 7 日版で，J.H. に対する反論を行っている。ジャスティスは，J.H. がシャフとニューマンの理論が相違しているかどうかは，「第一義的論点」ではないとするならば，はじめから「第一義的論点」について記すべきであると，J.H. をやりこめている。その上で，J.H. の批判に対して以下のように反論している。ジャスティ

40　J.H., “Historical Development,” WM, August 12, 1846.
41　Justice, “J.H.’s Communication and Historical Development,” WM, August 26, 1846.
42　J.H., “Historical Development,” WM, September 9, 1846.

スは，聖書において教会は確かに「キリストを礎石」として，「使徒と預言者たち」の上に建てられたものであるが，使徒の時代から，現在まで「世にある」教会は，教理的にも，教会統治としても完全なものではないと述べる。そして，偏見を持たず，シャフの著作を注意深く読むならば，J.H. による批判は，一つも適切な基礎を持っていないと結論せざるを得ないのであり，それゆえに，J.H. のシャフへの非難は，読者を啓蒙することはなく，むしろ彼自身の無理解を示しているだけであると痛烈に批判して議論を終えている[43]。

このような議論から，シャフの『プロテスタンティズムの原則』の論争が，どのようなものであったかを改めて理解することができる。それは，19 世紀アメリカにおける反ローマ・カトリック的風潮，またオックスフォード運動への感情的反発という要素を持ちつつも，議論が深まるにつれて，次第にプロテスタント教会の歴史的意義，またローマ・カトリック教会との歴史的連続性という，シャフの『プロテスタンティズムの原則』が提唱した当時のアメリカの諸教会にとっては，耳慣れない，斬新な理論が理解され，受容されていったということである。その意味において，ベルグらとの長く，激しい論争にもまた，シャフの言葉を用いるならば，教会の「歴史的発展」のための意義が存在していたということもできるだろう。

5. 結論

これまでシャフの『プロテスタンティズムの原則』を巡る WM 誌上での論争を中心的に考察してきた。その結果，確かに従来の先行研究で指摘されていたように，論争の背景には，19 世紀アメリカで根強かった反ローマ･カトリック的風潮が存在していたと言える。しかし，改めて WM における議論を整理した結果，シャフやネヴィンとベルグとの間の論争と限定することはできないことも明らかになった。従来の研究では，シャフの『プロテスタンティズムの原則』について論じる際には，ベルグがシャフ批判の代表者として紹介され，最終的には東部シノッドにおいてシャフの異端嫌疑が晴らされたことを通史的に記すに留まる傾向があった。しかし，実際には，シャフやネヴィン，そしてベルグだけでなく，複数の投稿者によって論争が展開されていたのであり，とりわけシノッドでの決議後には，J.H.（ヘルフェンシュタイン）によるシャフの歴史的発展の理論への批判が，盛んに投稿されていたことが分かった。また，論争は，偏見と誤解に基づく要素が多かったことは否定できないが，それでもなお，その論争を通して，プロテスタント教会の歴史をどのように認識するか，教会史的理解を深める上で一定の役割を果たしたということもで

43　Justice, “J.H’s and S.H.’s Remarks upon Historical Development,” WM October 7, 1846.

きるだろう。教派新聞における投稿という性質上，論争はどうしても断片的になりがちであり，神学的厳密さを備えていない傾向は否めない。また後世の感覚からすれば，時に水掛け論に陥っているとも見なしうる記述もあった。しかし，それらの不正確さを踏まえつつも，なお WM における論争を丹念にたどることで，次第にシャフの歴史認識が理解され，マーサーズバーグ神学への支持が読者の間に広がっていく様子を見て取ることができる。本論では，残念ながら紙数の関係で，3 年間ほどの論争しか見ることができなかったが，それ以降のマーサーズバーグ神学を巡る論争の歴史的展開については，今後の研究課題としたい。

付録 「WM 紙上における『プロテスタンティズムの原則』論争関係表」（論者作成）

番号	日付	投稿者および記事のタイトル
	1844 年	
1	8 月 28 日	シャフの按手
2	9 月 4 日	シャフの講演
3	11 月 6 日	シャフの就任式
4	11 月 20 日	ベルグのシノッドにおける開会説教
	1845 年	
5	6 月 18 日	『プロテスタンティズムの原則』英訳版出版
6	7 月 2 日	ベルグ「ドイツ改革派教会とは」
7	7 月 16 日	シャフの就任講演への書評紹介
8	8 月 13 日	ネヴィン「偽プロテスタンティズム①」
9	8 月 20 日	ネヴィン「偽プロテスタンティズム②」
10	8 月 27 日	ネヴィン「偽プロテスタンティズム③」
11	9 月 3 日	ネヴィン「偽プロテスタンティズム④」
12	9 月 10 日	ネヴィン「偽プロテスタンティズム⑤」
13	9 月 24 日	ネヴィン「シャフのプロテスタンティズムについて」
14	10 月 1 日	フィラデルフィア・クラシスの議事録（シャフ，ネヴィン，WM 編集者への非難決議）
15	10 月 8 日	フィラデルフィア･クラシスの一会員「霊的現臨について」, ネヴィン「神秘的現臨」
16	10 月 15 日	「我々の教授に対する弾劾について」，その他
17	10 月 22 日	「我々の教授に対する弾劾について続」，その他
18	11 月 5 日	シャフの『プロテスタンティズムの原則』に関するフィラデルフィア・クラシスの解決案についての委員会報告
19	11 月 12 日	Biblical Repertory 誌上における『プロテスタンティズムの原則』の紹介
20	12 月 10 日	「ランカスターの弾劾」，J.H.G「ドイツ改革派教会はワルド―派の分流か，それともカトリック教会から生じたのか
	1846 年	
21	1 月 21 日	テイラー・ルイス「教会についての疑問①」（Biblical Reportory 誌より）
22	1 月 28 日	テイラー・ルイス「教会についての疑問②」（Biblical Reportory 誌より）
23	2 月 4 日	テイラー・ルイス「教会についての疑問③」（Biblical Reportory 誌より）
24	2 月 11 日	匿名氏「神秘的一致」，J.H.「キリストと信仰者の一致」，ネヴィン「人間キリスト」
25	2 月 18 日	J.S. の投稿
26	3 月 4 日	匿名氏「聖餐におけるキリストとの一致」, ベルグ「キリストの位格」, W「マーサーズバーグ論争」
27	3 月 18 日	B「ウィークリーメッセンジャーの読者に向けて」，J.H.「マーサーズバーグ論争」
28	3 月 25 日	ネヴィン「神秘的一致についての謬見」，A.T.「我らの教授」
29	4 月 1 日	W「マーサーズバーグ論争」
30	4 月 15 日	A.H.「マーサーズバーグ論争」
31	4 月 29 日	W「マーサーズバーグ論争」
32	5 月 13 日	I.G.「沈黙する時」
33	5 月 20 日	匿名「マーシャル・カレッジへの攻撃」
34	7 月 1 日	ベザ「教会史とは何か」
35	7 月 8 日	ベザ「教会史とは何か」

36	7 月 29 日	クリスチャン・インテリゲンサーより「教会史とは何か」
37	8 月 12 日	N「オランダ改革派との関係」，J.H.「歴史的発展」
38	8 月 26 日	ジャスティス「J.H. の投稿と歴史的発展について」
39	9 月 2 日	W.C.B.「我らの神学教授」
40	9 月 9 日	J.H.「歴史的発展」
41	9 月 23 日	N「オランダとドイツの教会」
42	9 月 30 日	N「オランダとドイツの教会（続）」
43	10 月 7 日	「フィラデルフィア・クラシスの議事録抜粋」，ジャスティス「J.H. と S.H. の歴史的発展についての記述」
	1847 年	
44	1 月 20 日	ウェスト「マーサーズバーグと教会についての大きな疑問」
45	2 月 24 日	ウェスト「宗教を単なる形式に置き換えることの危険性」，W.C.B.「改革派教会」